

第28号

平成22年11月

発行 高知厚生病院
広報委員会

◆ 高知厚生病院の理念・基本方針 ◆

理 念

私たちは、安全かつ質の高い医療を提供し、皆さまに信頼される病院を目指します。

基本方針

1. 患者さまとご家族、更に地域の皆さまの幸せのための医療を実践します。
2. 患者さまの権利を尊重し、真摯かつ温かい態度で接し、心と心が通い合う医療を実践します。
3. 自己研鑽に努め、更に発展向上を目指します。
4. 地域の医療機関や施設と連携し、効率的な医療を目指します。
5. 地球環境に留意し、災害への備えを怠りません。

“おくりびと” 青木新門さんの講演より

副院長 山口 龍彦



映画「おくりびと」を見られた方も多いと思う。私には映画を見る習慣などともなかったのだが、この映画は何故か引かれて平日の深夜に一人でこっそりと見に行った。その日の疲れが吹き飛ぶような感動があり、私の涙腺は開きっぱなしで、翌日も目が腫れてその言い訳に困った記憶がある。映画を見ているとき、次の展開はこうなるんじゃないかと不思議に感じてしまうという体験もした。とてもいい映画だと思った。そうしたら、アカデミー賞を取ったのである。

盛岡で、映画「おくりびと」の原作者、青木新門さんの講演を聞く機会に恵まれた。原作者とは言っても、青木さんの著書「納棺夫日記」とはかなり異なる筋書きだったようで、例えば、青木さんは富山で活躍されていたのだが、映画の脚本では山形になっていたとか、映画に出てくる石文（いしぶみ）の習慣はまるでアメリカインディアンで、そんな習慣は富山にはない・・・だとかがあって、青木さんは原作であることを辞退されたという。

しかし、そんなエピソードは私にとってどうでもいいことだ。日本には、一人ひとりのいのちを最後まで大切に扱う文化があり、それに感動して映画化しようと強く思った本木雅弘という青年がいて、広末涼子さんなど素晴らしいスタッフが集まって映画を作ったら国際的にも評価を受けたのである。感動は全世界に通用するものだったのだ。

盛岡の講演では、青木さんの原体験はどのようなものであるかを知ることができた。彼は満州へ移住した家族の長男であった。終戦のとき、父親はソ連兵と戦い、行方不明となった。残された母親と小さな妹と共に一家三人は収容所に入れられ、劣悪な環境でシラミがわいた。やがて発疹チフスが蔓延し、母親が隔離され子供たちが取り残された。ある朝、起きてみると妹は息をしていなかった。彼は仕方なく妹を収容所の裏

にある死体置き場の灰の上に捨ててきたのである。誰かが焼いてくれるだろうと期待して。

2008年7月、終戦当時米軍の従軍カメラマンだったジョー・オダネル氏が50年間隠しておかざるを得なかった写真が長崎で公開された。青木さんはそれを見に行った。

そのとき、死んだ弟を背負い焼き場にやってきたこの男の子の写真を見た瞬間に、青木さんは嗚咽をこらえることができなくなった。これは自分自身だと思ったという。背負ってるのは弟か妹かの違いはあるけれども、まさしく六十数年前の自分に出会った。そして、その時の思いが迸り出てきたのだ。

この写真は9月22日頃、長崎の浦上天主堂近くでの撮影であるという。原爆投下からひと月あまりこの子の弟は生きていたことになる。しかし、とうとう死んでしまったのだ。男の子が焼き場へつれてきているということは、彼の両親は健在ではあり得ないだろう。

青木さんの体験を聞いて、また、この写真を見て、私もあふれる涙をこらえることはできなかった。隣の席で聞いておられたカール・ベッカーさんも激しく嗚咽していた。

(オダネル父子の努力によって実現した長崎での写真展は、2008年8月7日にNHKスペシャル解かれた封印―米軍カメラマンが見たNAGASAKIとして報道された。)

青木さんのように、人のいのちを軽々しく扱う時代の原体験を持っている人たちが少なくなっている。そして、その体験はたいていは家族にも封印されたままのことが多い。戦後生まれの私たちは、生まれた時から空気と水と平和はただで手に入るものと思い込んでいるのではないかとも思う。歴史に学ぶならば、自らの生命、安全、財産は自ら守るものであって、それは国も同様である。自らの防衛を他国に依存して滅亡しなかった国はないというのに。

龍馬伝が人気だが、龍馬は幕藩体制では日本が守れないから、強い中央集権国家としての日本を目指した。他国を侵略してはいけないが、侵略させてもいけないのである。自分の国は自分で守る、龍馬が目指した普通の国になるべき時が来たのだと思う。

日本の平和が、このまま続きますようにと、心から願う。そして祈る。



院内の催しのご報告

「ホスピス緩和ケア週間」～病棟見学会より～

岩本 泉

高知厚生病院では平成18年度より「世界ホスピス緩和ケアデー」や「ホスピス緩和ケア週間」にちなみ、ホスピス緩和ケアの普及啓蒙活動に取り組んでおります。

今年も10月7日木曜日の午後2時から午後4時まで、ホスピス緩和ケアについての説明会や病棟見学、ミニコンサートを開催いたしました。

当日は、当院2階の会議室に公募にてお越し下さった19名の方々に副院長、事務部長、看護部長、病棟師長でお迎えしました。



参加下さった方の中には一般の方や医療従事者、また現在ご家族ががんで治療中の方もいらっしゃいました。

最初に山口副院長がホスピス緩和ケアについて、スライドとパンフレットを用い説明を行いました。

その後、質疑応答の時間をとり説明で分からなかったこと、困っていることや不安に感じていることを質問していただき、和やかで貴重な時間が共有できました。次に緩和ケア外来やチャペルの見学後、緩和ケア病棟へ移動し見学会とミニコンサートを開催しました。ラウンジでは、ホスピスボランティアの方たちがお茶やコーヒーでおもてなしをいたしました。

今後も継続して開催いたしますので、どうぞどなたでもお気軽にご参加下さい。

朝の3分間スピーチ 9月21日火曜日 通所リハビリテーションこうせい 佐野 栄治

一昔前では敬遠される対象だった鉄道マニアも、ここ数年で一般に認知されつつあり鉄という愛称が付いています。その鉄にも種類があり、写真をとる撮り鉄、乗って楽しむ乗り鉄、子供と楽しむお母さんのママ鉄、さらには鉄道アイドルの鉄ドルといったものまであります。有名人ではタモリさんや俳優の原田芳雄さん等も鉄道マニアだそうです。

そういう僕も最初はあまり興味がなかったのですが、この鉄道ブームに乗かってしまった一人で、きっかけは子供のおもちゃを買った時、その電車で興味を持った事、同じころに鉄道のTVを見てしまった事だったと思います。

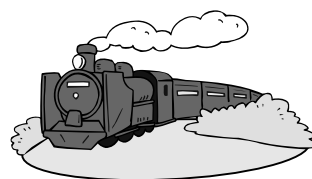
この7月には山口にSLが走っているということで家族で乗り鉄の旅にも行ってきました。SLが走っているのは山口線という線路なのですが、あまり都会ではなく、のんびりとした住宅街を抜け山の中を走っています。山にはトンネルがいくつもあり、入る時には「窓を閉めてください」とアナウンスが流れ、汽笛や蒸気の声と共に「昔の旅」と「今の旅」の違いを感じる事が出来ました。

田園の中を走っている時は田んぼに汽車のはいた煙の影が映ったりと、発見や感動のオンパレード、路線沿いには何十人もの撮り鉄の人たちがいて、笑いすら感じる事が出来ました。

さて、10月には社員旅行で島根の出雲のほうに行かれると話を聞きましたが、出雲地方には一畑電気鉄道という島根では唯一の私鉄があります。この一畑電鉄、最近レイルウェイズという中井貴一さんの映画でも取り上げられた電鉄で、宍道湖温泉～出雲大社の間を走っています。途中、宍道湖の側を走ったり、今はなくなりましたが、29文字の日本一長い名前の駅があったり、見どころもたくさんあります。特に旅行で行く出雲大社前には旧大社前と新大社前駅があり、旧駅は国の重要文化財にもなっている建物なので時間があれば見ていただきたいと思います。ちなみに新駅は何故かイスラム風になっているのでギャップを見るのも面白いのではないのでしょうか。

一畑電鉄は、経営難から廃線の危機に陥った事があります。一畑電鉄では沿線の住民の高齢化等、存続の必要性もあり資金提供を受け廃線を免れたそうです。ここに限らず全国のローカル線では珍しい話ではありません。

確かに自動車や他の交通手段も発達してきている現在、鉄道の存続価値は薄れつつありますが、自分としては今一度のんびりとした中で鉄道の魅力を再発見し、鉄道の活性化につながり、廃線になる路線が減ればいいなと思っています。



職員旅行

絶景の大浴場、皆生温泉と今話題の山陰を訪れる旅

明神 聡



去る 10 月 10 日、11 日に“絶景の大浴場、皆生温泉と今話題の山陰を訪れる旅”をテーマ（旅行会社より）に一泊二日の職員旅行がありました。

テーマのとおり、ゲゲゲの女房観光ブームで山陰へ向かう車は多く、途中工事中区間もあり渋滞時間が長く、予定通りには進まず全国の神々が集合している、今話題のパワースポット「出雲大社」には行くことが出来ませんでした。

あまりにも有名なマメ知識ですが、10 月を全国的には「神無月（かんなづき）」といいますが、出雲では「神在月（かみありつき）」と言います。これは、全国の八百万（やおよろず）の神々が出雲にお集まりになられるからだと言われている。

残念ながら、神々のパワーは感じる事は出来ませんでしたが、宴会でのみんなのパワーは存分に感じる事が出来ました。とっても楽しい時間が過ごせました。

2 日目は、足立美術館に行きました。さすが、7 年連続日本一に輝いた庭園は圧巻で、誰もが「うわぁ！」と歓声を上げるぐらい素晴らしいと思いました。

庭園の中には降りることはできませんが、窓枠を額縁に見立てて庭を鑑賞する方法は非常に斬新に感じました。でも、そこには必ず人の頭があって、人気の高さと、自分の背の低さを改めて実感しました。

この写真は、日本一大きいゲゲゲの鬼太郎像と楽しい仲間達の一枚です。

日頃、あまり接することがないスタッフとも、一緒に過ごすことにより、日常業務の顔とは違う一面も見る事が出来て、とっても楽しい旅行になりました。

院内行事

高須保育園敬老運動会



10 月 13 日 地域交流として高須保育園の敬老運動会に通所リハビリの利用者さんと参加してきました。やっと歩けるようになった乳児

さんから、来年小学校にあがる年長さんまで、かけっこや踊り、鼓隊など、一生懸命がんばっている姿に感動しました。子供達から素敵な首飾りをもらいました。



当院は平成15年9月22日より日本医療機能評価機構認定病院となっております。



◆ 特定非営利法人日本緩和医療学会より認定研修施設として認定されました

◆ 厚生労働省より医師の卒後臨床研修施設の認定を受けました

3 階病棟・通所リハビリ運動会



10 月 19・20 日 各部署恒例の運動会を開催しました。写真は、パン食い競争です。どの競技も白熱し盛り上がり

ますが、今年の病棟でのヒットはボーリング対決と宝探しでした。普段と違う患者様の姿に感動しました。

春野町 菊見学



11 月 1 日～ 10 日 春野町のピアステージに菊を見にいきました。今年は大輪の花や、小懸崖や五重の塔、龍馬等も見

事でしたが、はなのトンネルなども、色とりどりで眩しいくらいきれいでした。「来年も長生きして見に来よう」といってくれる方も多くよかったです。



高知厚生病院

〒781-8121 高知市葛島 1 丁目 9-50 Tel.088-882-6205 Fax.088-883-1655
ホームページ <http://www.kochi-koseihp.jp>